



「地域の人々にとっての山垣遺跡」 図録（参考資料）

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 5(平成18年度事業報告書):176-183

(Issue Date)

2007-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002278>

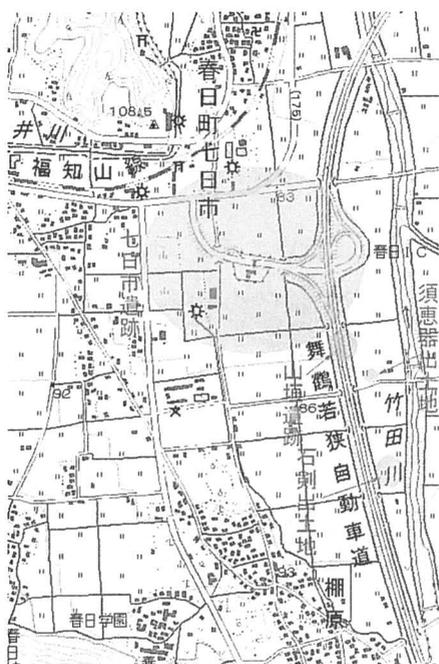


山垣遺跡のある春日町棚原地区では、近年、自分たちの住む地域の歴史をもっと知り、それを地域づくりに活かそうという取り組みが始まっています。また昨年から神戸大学文学部地域連携センターは、丹波市教育委員会と連携してこの取り組みを支援し、地区内の古文書の共同調査をおこなっています。

今回の地域文化財展のエピローグとして、地元の住民が見だし、また新たに復元した歴史資料を中心に展示するコーナーを設けました。この展示を通じて、地域の文化財や歴史遺産をもっと身近なものに感じていただければ幸いです。

神戸大学文学部地域連携センター
棚原区パワーアップ事業推進委員会

春日町棚原付近の遺跡の位置と概要



丹波市春日町棚原字山垣にある「山垣遺跡」は、北近畿自動車道舞鶴線の建設に関連して発見された遺跡です。

この自動車道路の建設が予定されていた棚原・七日市地区は、もともと未知の遺跡が数多く埋蔵されている可能性が高い地域でした。そこで、道路建設に先立ち兵庫県教育委員会は、1982（昭和 57）年 12 月に確認調査を、翌年 4 月より記録保存を前提とした全面調査を実施しました。

その結果、春日中学校から野上野の集落を結ぶ東西基幹農道を挟んで北（山垣遺跡）と南に各一箇所遺跡の存在が確認されました。とくに北側の地区からは、郡符木簡や「春部郷」（かすかべのさと）などと書かれた墨書土器も発見され、この遺跡を一躍有名なものにしました。

▼ 七日市遺跡現地説明会

1984（昭和 59）年撮影 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所提供



地元の人々により表面採集された遺物

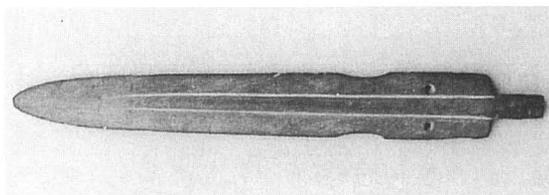
表面採集とは、地表面に散布する遺物を採集することです。表面採集された遺物は、耕作などにより原位置から移動したものであり、その点では原位置から発掘された遺物よりも資料的価値は低くなります。しかし、これらの遺物や分布する位置・範囲などから、遺跡の中心部や規模、または時代や存続時期の推定が可能となります。

発掘調査が行われる以前から、春日町棚原の遺跡付近でも、多くの地元の方々がこの表面採集をおこなっています。

～野村遺跡付近から表面採集された石剣～

野村遺跡は、竹田川西岸の段丘に広がる水田地帯にあります。この付近の水田から 1968（昭和 43）年 9 月に瓦土を採取中に、表土下 30cm の深さから石剣が出土しました。この付近では当時、農閑期になると耕土を取り除き、その下にある粘土を瓦土として採取していたそうです。

石剣は、弥生時代中期、祭器として銅剣を摸して造られたものです。出土地の北側には七日市遺跡があり、さらに東方約 700m の位置には銅鐸 2 口が出土した野々間遺跡があります。これらの遺跡と関連して、弥生時代の祭祀形態を考える上で貴重な考古資料です。



▲ ^{ゆうひしき}有樋式磨製石剣 長さ 31.9cm × 最大幅 3.99cm

弥生時代中期 丹波市教育委員会所蔵

～山垣遺跡付近から表面採集された須恵器～

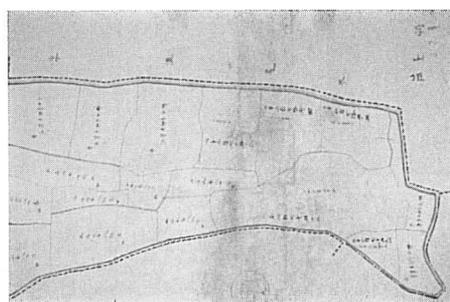
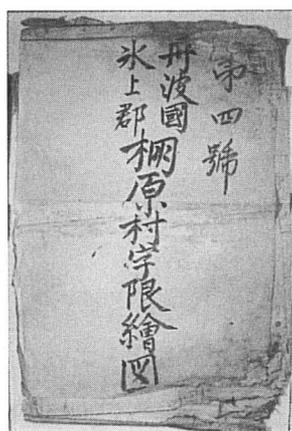
丸底で蓋受けの立ち上がり備えた杯形の身と、径が身とほぼ同じになる蓋とが組み合わせとなっている古墳時代の須恵器（すえき）は、蓋坏（ふたつき）と呼んで区別しています。当時の供膳具として使用されたとみられているこの須恵器は、古墳時代後期初頭（6世紀初め）のもので、これまでの七日市、山垣遺跡の調査では6世紀代の遺構は確認されていません。この須恵器は付近に古墳時代の集落の存在を示す資料である可能性があります。



▲ ^{すえき}須恵器蓋坏

古墳時代後期初頭 個人蔵

発見者からの聞き取りによれば出土地点は現在の棚原集落の北縁にある大嶋浄水場西側だそうです。北近畿自動車道舞鶴線の開発が始まる以前の昭和 40 年の冬頃に、山垣は土地が高く、用水が引きにくいため耕地面を 30cm 下げました。この須恵器は田んぼの耕土をさらに 30cm ほど掘り返していた際に採集されたとのこと。山垣遺跡の立地を考える上で興味深い証言です。

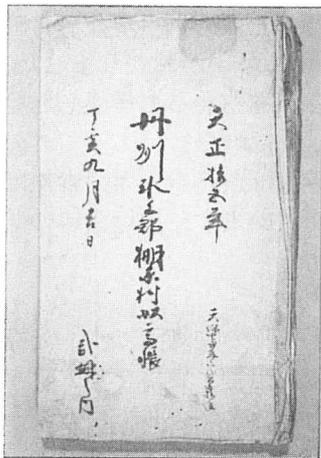


▲ 丹波国氷上郡棚原村字限絵図と字山垣部分
明治時代 棚原区所蔵

明治の地租改正の際には、大きな和紙に土地の位置関係や形状、地番、面積を記した字限図（あざきりず）という図面が作成されました。

これによると、山垣遺跡のあたりは、「田」として利用されていたことがわかります。

地区の古文書から見える「山垣」



▲ 丹波国氷上郡棚原村名寄帳 (矢印は字山垣部分)
天正 15 年 (1587) 波多家文書

丹波国氷上郡棚原村名寄帳は、検地の結果を記した土地台帳です。丹波市の指定文化財として、現在は春日歴史民俗資料館に保管されています。

豊臣秀吉が天下統一の重要な事業として、天正 10 (1582) 年から慶長 3 (1598) 年まで、全国の大名に命じて検地を行わせ、年貢割り当ての資料を作らせました。検地帳は普通二部作って、一部はその村に保管させました。この史料も村に残されて現在に伝わったものです。

丹波国のうち現在の兵庫県域にあたる氷上郡・多紀郡内で行われた太閤検地に関する史料は、天正 15 (1587) 年氷上郡金屋村の検地帳と、天正 20 (1592) 年多紀郡奥谷村の水帳写しかありません。その意味でもこの棚原村の名寄帳(なよせちょう)は、近世初期の農村や、丹波における太閤検地の実態を知る上で貴重なものといえます。

内容を見てみると、村の田畑屋敷の各筆の字名・面積・石高を、名請人(年貢負担者)ごとに記載した名寄帳の形式をとっています。たとえば、矢印部分の山垣に関する一筆ごとの記載では、

山かき

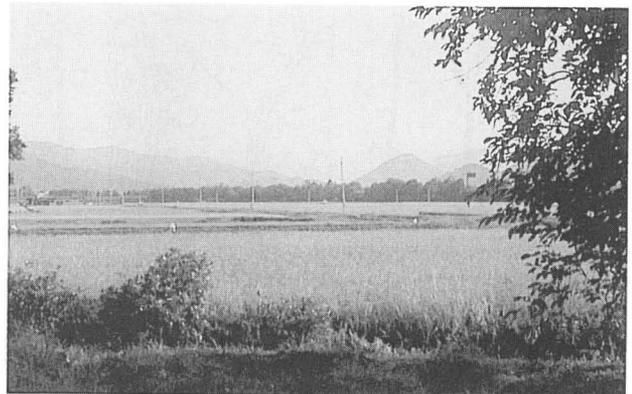
廿七代 六斗四升八合 同(又五郎のこと)

とあり、字名が山かき(山垣)、田の面積は 27 代、石高(標準生産高)は 6 斗 4 升 8 合、名請人は又五郎であったことがわかります。この名寄帳には、字「山垣」に関する記載は全部で 14 箇所(筆)みえ、面積は計 9 反 47 代、石高は計 11 石 8 斗 3 升 8 合となります。田地の等級ごとの 1 反あたりの生産高をしめす石盛は、ほとんどが 1 石 2 斗でした。

写真からみる風景の変遷



▲ 1961 年 11 月の山垣遺跡付近 (写真右奥)
三宅敏男氏提供



▲ 2006 年 8 月の山垣遺跡付近
三宅敏男氏提供

この 2 枚の写真は、ほぼ同じ地点から山垣遺跡の辺りを北方向に撮影したものです。市島町との境にある小富士山の方角(写真右奥)に山垣遺跡があります。1961(昭和 36)年当時は未だ牛耕風景がみられました。また 40 年以上前には小さかった柿の木(写真右手前)も大きく成長しています。写真奥に見える茂みは舞鶴自動車道の側面です。左奥の瓦屋の建物は、40 年前とほぼ同じ位置に建っています。

皆さんがお持ちの古い写真にも、町や村の記憶が詰まっています。棚原区パワーアップ事業推進委員会では、このような地元の古写真を集めています。お持ちの方は、ご一報いただければ幸いです。

地図資料からみる山垣遺跡付近の様子

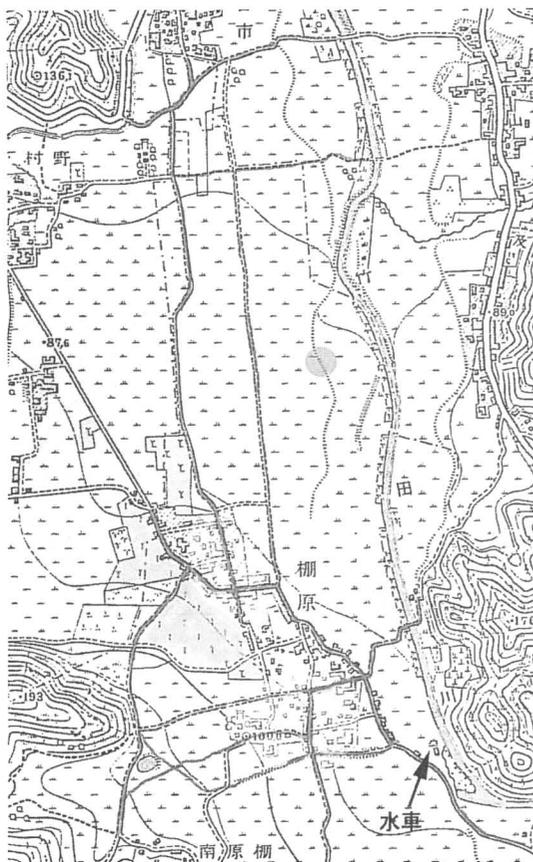


▲ 元禄3年棚原村・長谷村山論につき立会絵図写
元禄3年(1690) 個人蔵

今から約300年前の元禄年間に棚原村と長谷村(現在春日町国領地区)との間で入会山の境界について争いが起こりました。この絵図は、裁判の中で両村の関係者が立ち会って作成した絵図の写しです(表紙に全体図を掲載)。京都町奉行によってこの絵図に境界線が書きこまれました。赤線は道路を、太い青線は竹田川を、細い青線は水路をあらわしています。山垣遺跡のあたりは、田んぼとして描かれています。

左下の地図は、明治29(1896)年発行の陸測図です。元禄の絵図から読み取れる道路を赤、川や池を青、集落を黄で塗り重ねてみました。その結果、近世の面影をよく残していることがわかります。緑の部分は、明治期に桑畑だったところです。現在も一部ですが、桑が植えられています。丸印が山垣遺跡に該当します。山垣遺跡付近を南北に走る小径は、地元の人によれば、田んぼに向かう通り道で、川に向かってかなりの傾斜があったといいます。また、この竹田川の西岸(右下あたり)に、水車小屋があったことが確認できます。

右下の地図は、昭和47,8年に発行されたものです。近世以来の古道がまだまだ使われていますが、一方で新しい直線的な道がつくられたことがわかります。



▲ 明治26年測量の1/2万陸測図(黒井村)
明治29(1896)年発行



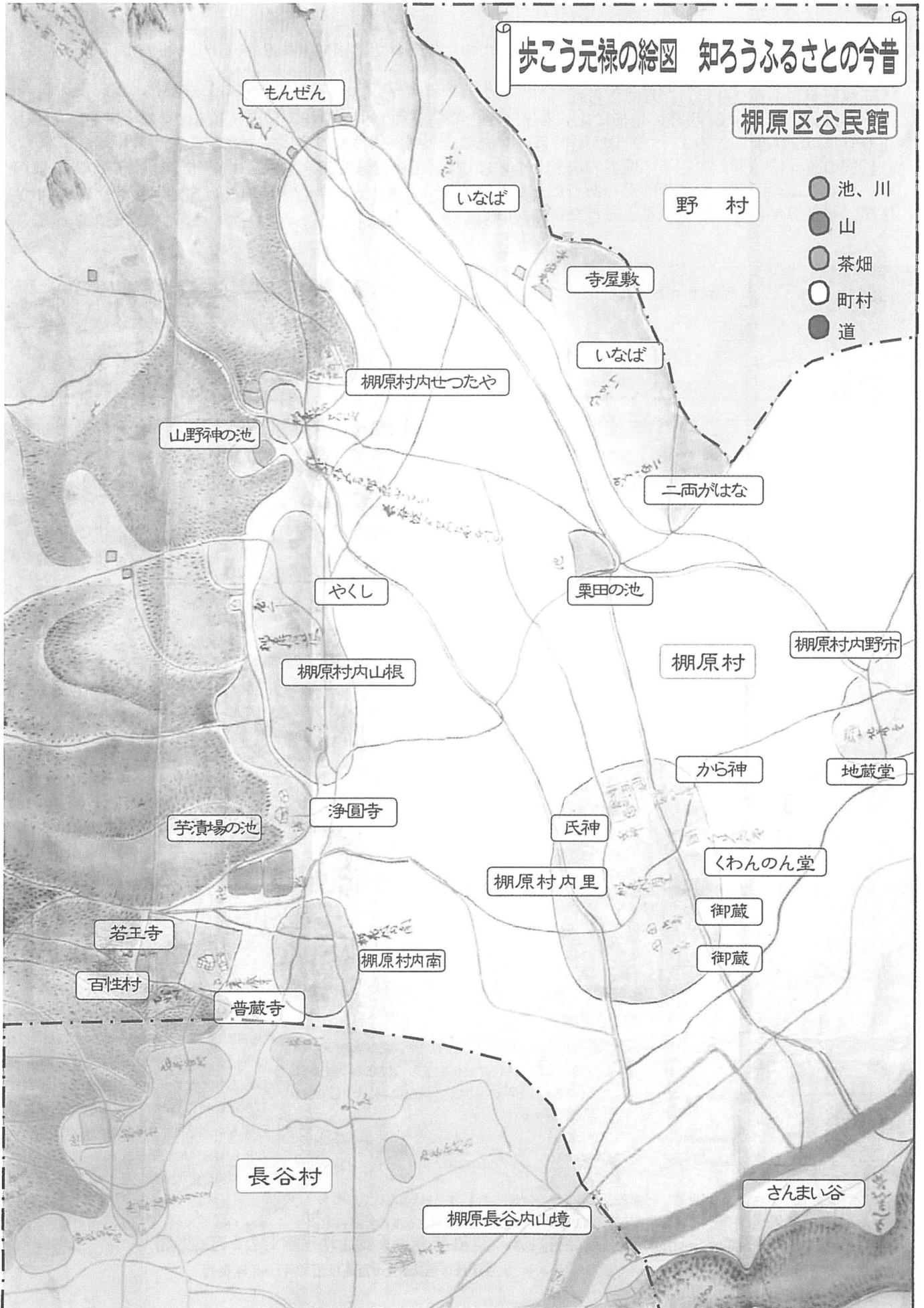
▲ 昭和46年測量国土地理院1/2.5万地形図
柏原・宮田を合成 昭和47,48年発行

山垣遺跡は、旧竹田川によって形成された最も東の低位段丘(微高地)に位置します。遺跡のすぐ東が段丘崖となっており、遺跡がある小径はかなり傾斜があったという、地元の方の聞き取り内容と一致します。古い地図を手に、どのような地に遺跡があるか実際に歩いてお確かめください。

歩こう元禄の絵図 知ろうふるさとの今昔

棚原区公民館

- 池、川
- 山
- 茶畑
- 町村
- 道

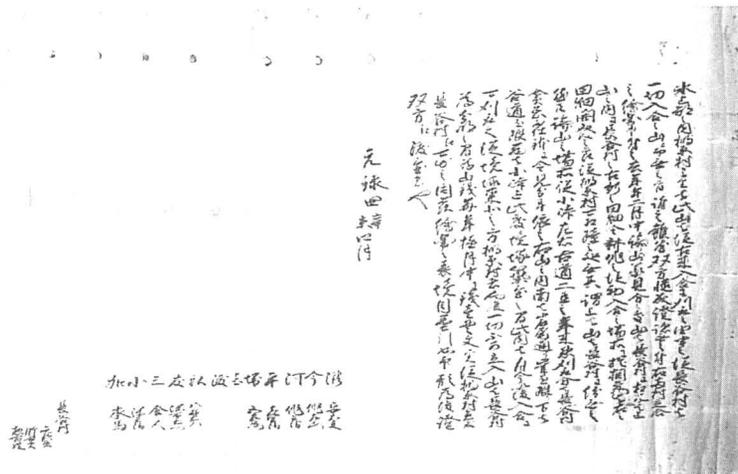
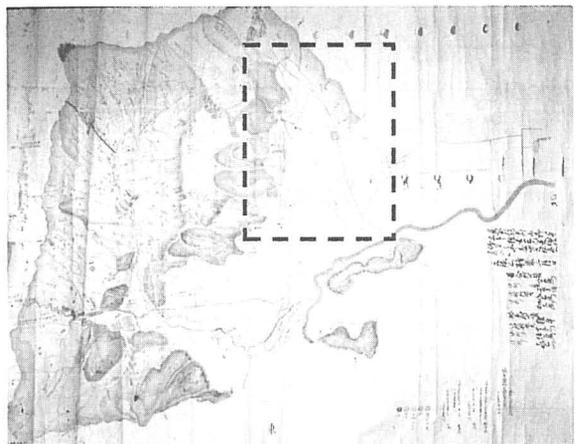


元禄三年に作られた絵地図(個人蔵)について

長谷村(現国領)と棚原村で山境の論争解決のために作られた絵図で縦約2メートル、横1.7メートルの極彩色の絵図面です。

元禄三年(1690年)二月に作られ、両村の庄屋、肝煎(村の世話役)数名の署名があります。絵師は誰であるかは分かりません。現在の地形に比べるとかなりいびつですが伊能忠敬が正確な日本の地形図を完成する100年以上も前にこのような地図が作られていたことはオドロキです。

絵図の裏面には翌元禄四年に境界の決着がついた旨の文書が残されています。長谷村と棚原村で山境の論争についてはこの絵図が作られる前からあったらしく、区の庚申堂の古文書の中に貞享三年(1686年)に棚原村庄屋、年寄等から奉行所宛に書き送った書状が残されています。



▲ 絵図の全体図

左頁の図は点線で囲まれた部分を拡大したものです。

▲ 絵図裏面の論争決着文

南付近

山根集落東端の浄園寺下を通り今で言われている鹿(シシ)道との交差点を過ぎると『棚原村内南』と書き表された集落に至ります。山麓の若王寺、普蔵寺の位置はほぼ現在と同じです。集落内で山裾を廻って西長谷村への道と長谷村中心部(長谷村内国領町)に通じる道に分れています。

山根付近

摂待屋を過ぎると『棚原村内山根』と書き表された集落を通ります。集落の中央よりやや西に『やくし』とかがかかれています。この付近に薬師如来が祀られていたものと思われま。現在薬師如来像は浄園寺境内の粟島神社に祀られていますが、もとの薬師堂は高雄山中腹にあったと伝えられており、元禄時代には山根集落内に移されていたものと思われま。浄園寺は山根集落の東端に表記されていますが当時はほとんど南集落に近い所に位置していたのでしょうか。

棚原村の中心部

棚原村の中心部は『里』と呼ばれていたようです。現在の下地、西地、前地が一つにまとまった集落となっており集落内には氏神、観音堂などが祀られており周辺の集落に向かって放射状に道路が伸びており村の要衝であったことを伺わせます。

野市(辻、下)付近

棚原中心部の下に『棚原村内野市』と書き表された集落があります。当時はまだ辻、下の分割はされていませんでした。村の中心部から集落のほぼ真ん中を通って北に伸びる道と金毘羅山麓を廻って東西に迂曲しながら走る道との交点が現在の『辻』の中心と思われま。交点の近くに『地蔵堂』の表記があり表記の上に祠らしい絵も描かれています。現在の辻の地蔵さんの台座はこの交差点の傍らに建てられていたものを使っています。

摂待屋付近

門前から毘沙門社の小山の山すそを廻ると道は『棚原村内せったや』と書き表された小さな集落を通ります。せったやは『摂待屋』が訛ったもので棚原見てある記にもあるように門前付近の寺や毘沙門社に参詣する人、大谷超えて往来する人に接待をする場所であったと言われてま。ここで道は大谷峠から村の中心部に通じる道と交差し、当時は賑わっていたと思われま。

現在の金毘羅山麓から門前に通ずる道

毎年春秋に祭礼が行なわれる金毘羅神社はこの地図が作られてからおおよそ180年くらい後(文政十年:1827年)に祀られましたので絵図には書かれていません。現在金毘羅さんが祀られている山は『いなば』と呼ばれていたようです。現在の金毘羅さんの位置から少し門前より歩いたところから野村に抜ける山道の途中に寺屋敷と書かれています。文字と共に描かれている凡例は茶畑になっているので、このあたりに寺院関係のお茶の栽培地があったのかも知れませ。門前と書き表された付近で道は毘沙門社を経て山根に通じる道と山間に分け入り柏原に通じる峠道に分れています。

大学・自治体・住民との連携事業による、地域の歴史遺産を活かしたまちづくり

～棚原区パワーアップ事業推進委員会の活動～

棚原という地名は古く、康応2年(1390)の熊野本宮大社文書の春日部庄玉泉坊引檀那願文にみえます。近世の棚原村は、寛永11年(1634)亀山藩領、元禄10年(1697)亀山藩と幕府領との入り組みとなり、寛延元年(1748)に亀山藩領となりました。天保郷帳では、村高1,189石の大村でした。

地区内の庚申堂には、近世以来の古文書があり、大正2年(1913)には住民の上田捨蔵氏が調査をし、箇条書きの目録を残し、さらに大正5年には、このうち主要なものを卷子本にして保存しています。

パワーアップ事業推進委員会は、地域の神社や祠、寺院、古文書などの地域歴史遺産を保護・継承して後世に伝え、町づくりを行っていくことを願って地元住民が結成した委員会です(現13名)。丹波県民局・こころ豊かな美しい丹波推進会議・国領地区社会教育振興会の助成も得て、2004年度は、地区内にある神社や祠、寺院、古文書などをカラー写真で紹介した『棚原見てある記』(A5判、91頁、1冊700円)の冊子を発行しました。

2005年度は、『棚原見てある記』に掲載した史跡のうち、11箇所を立て看板を設置、映像でも伝えていくためにビデオ映像の作成にも着手しました。また7月24日には、丹波市教育委員会や村上完二文化財保護審議会委員長らの協力も得て、古文書の第2回調査を実施し、大正2年の目録との照合作業を行いました。

棚原見てある記

TANABARA GUIDE

～神戸大学文学部地域連携センターとの出会い～

神戸大学との出会いは、2005年の秋でした。神戸大学では、2002年の11月以来、文学部内に地域連携センターをつくり、県内の自治体や住民団体と連携しながら、地域の歴史遺産や文化財を活かした町(里)づくりを支援する事業を始めていました。丹波市教育委員会の紹介のもと、これを知った委員会メンバーの方が、直接センターに来室され、古文書の解説や歴史遺産の活用事業への協力を申し出てられました。

これ以来、丹波市教育委員会とも連携しながら、史料調査や古文書の整理作業を共同ですすめています。また2006年の夏には、兵庫県立考古博物館(仮称)の先行ソフト事業の地域文化財展に、急遽これまでの研究成果や足取りを共同展示することが決まりました。

その直後から、山垣遺跡に関連する資・史料の共同調査や、地区内の遺物・史跡・景観をめぐる聞き取り調査など、パワーアップ事業推進委員会の方々には、さまざまな点でたいへんお世話になりました。また展示コーナーの一角に、自ら作成された歴史景観マップ「歩こう元禄の絵図 知ろうふるさとの今昔」とその解説文の一部をご提供いただきました。

丹波市内には、この棚原地区のほか、地域の歴史文化を探求する熱心な住民グループがあると聞いています。今後このような大学と地元住民と自治体が連携した町づくりの動きがますます活発となれば幸いです。



▲第1回古文書講座(2006年7月30日、於棚原公民館)

最後に今回の地域文化財展「古代氷上郡の役所と村」の展示解説図録(別刷)作成にあたりご協力いただいた皆様や各機関の方々に心から御礼申し上げます。

(この図録は神戸大学文学部の松下正和・坂江渉が編集しました)

県立考古博物館(仮称)先行ソフト事業 地域文化財展 「古代氷上郡の役所と村」展示解説図録(別冊)

地域の人々にとっての山垣遺跡 ～地域の歴史遺産を活かした町づくり～

2006年9月16日発行 編集・発行 神戸大学文学部地域連携センター

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 電話 078-803-5566 メール area-c@lit.kobe-u.ac.jp

印刷 ウニスガ印刷(株) 〒677-0054 兵庫県西脇市野村町大坪471 電話 0795-22-3226